

新九郎通信



発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
e-mail: kinoshita@iseji.net

ようやく秋らしい陽気になりました。公募展、個展、展覧会と、芸術の秋本番です。10月の小田原は大きなイベントで幕を開けます。JC日本青年会議所の全国大会(1, 2, 3日)では2万人が小田原へ来られます。第4回小田原映画祭(25, 1, 2, 3日)もコロナワールド、TOHO シネマを会場におこなわれます。城址公園では2, 3日「第2回井サミット」が開催され、B級グルメブームに乗って5万人の出入が予想されています。活気ある町の風景に出会えるのは楽しみです。

10月の新九郎はおなじみのグループ展が飾ります。小田原を訪れてくださった方々が気持ちよくお帰りいただけるよう、小田原市民で町を盛り上げていきたいと思う今日この頃です。

新九郎 10月の展覧会のご案内

会 期	展 覧 会 名	見 どころ
9/29(水)-10/4(月)	つばめ写友会写真展	18名の会員による写真展、風景・草花・人物・各地の行事等、自由なテーマの作品約60点
10/6(水)-10/11(月)	新樹展	小田原を中心とした会員で、毎年発表している日本画のグループ展。会員8名、約30点
10/13(水)-10/18(月)	第13回 湘展	art circle「湘の会」(住谷重光氏主催)の作品展 身近な風景や静物等の水彩・油彩
10/14(木) イベント	新九郎デッサン会 18:15~20:45	2時間固定ポーズ、コスチューム アマチュアモデルです。 会費 1500円
10/20(水)-10/25(月)	フォト∞ムゲン第10回写真展	7名の会員による写真展、風景等約60点
10/27(水)-11/1(月)	人生遊々展	旧三中三期生による作品展、水彩・油彩・水墨画・書・ 絵てがみ・写真・盆栽・花・人形・陶芸等

近隣・友の会会員の展覧会情報

大漁!小田原井展	9月30日(木)~10月3日(日)	小田原宿なりわい交流館(0645-20-0515)
南足柄市美術展	9月26日(日)~10月3日(日)	南足柄市文化会館 2F(0465-74-0772)
第69回松永義夫日本画展	9月29日(水)~10月3日(月)	飛鳥画廊(0465-24-2411)
第19回アトリエベルフォーレ展	10月6日(水)~10月11日(月)	飛鳥画廊(0465-24-2411)
日野顯秀絵画展	10月20日(水)~10月25日(月)	飛鳥画廊(0465-24-2411)
中川セイイチロウ展	10月7日(木)~10月11日(月)	ツノダ画廊(0465-22-4263)
幼なじみの三人展	10月14日(木)~10月18日(月)	ツノダ画廊(0465-22-4263)
秋桜会展 cosmos24th	10月21日(木)~10月25日(月)	ツノダ画廊(0465-22-4263)
古屋隆士(水彩画展)	10月1日(金)~10月31日(金)	はげ八鯨 (0465-22-0945)
小田原百景諸星和男とその教室の仲間たち展	10月14日(木)~10月18日(月)	アオキ画廊(0465-23-5624)
第10回水彩画クラブ展	10月21日(木)~10月25日(月)	アオキ画廊(0465-23-5624)
佐藤 哲 油彩展	9月29日(水)~10月11日(月)	お堀端画廊(0465-23-7819)
第32回グループ・アトリエ展	10月13日(水)~10月18日(月)	お堀端画廊(0465-23-7819)
第14回ゑのぐ箱展	10月20日(水)~10月25日(月)	お堀端画廊(0465-23-7819)
遠藤茂子展	10月9日(土)~10月24日(日)	すどう美術館(0465-36-0740)月火休館
石原瑞穂展	10月9日(土)~10月24日(日)	すどう美術館(0465-36-0740)月火休館
佐藤北久山 創作木版画展	9月18日(土)~10月11日(月)	松永記念館(0465-23-1377)
第75回記念 西相展	10月20日(水)~10月24日(日)	小田原市民会館(0465-22-7146)
第62回湯河原美術展	10月5日(火)~10月10日(日)	湯河原町立図書館 3F (0465-63-4155)
住谷重光展	10月4日(月)~10月10日(日)	○ギャラリー(銀座 03-3567-7772)
ENK DE KRAMER 展(エンク デ クラマー)	9月4日(土)~10月31日(日)	ナヤカフェギャラリー (0460-82-1259)水4木休

パリより [横井山泰]

パリ3区、レブユブリック駅近くに住んでいる。恩師の相笠昌義先生の推薦で文化庁の助成を



頂いての滞りである。下見も無しに、日本からネットで契約した物件だったのだが、立地が素晴らしかった。玄関を出て10分程で、ピカソ美術館(周囲には現代美術ギャラリーの密集している)。そこから東に進むとマレ地区(日本の表参道の様な所)の中心。西に進むとポンピドーセンター、その先にルーブル、コンコルド広場、シャンゼリゼ。直進するとセーヌ河、ノートルダムを経てモンパルナスに至る。ギャラリーは、どこも広い。「地図の場所にいるのに見当たらないな」と、よくよく見れば、門をくぐり中庭の先にギャラリーという不思議な所もある。この手のギャラリーにニューヨークやマイアミに支店、本店を持つ所が多いようだ。今のところ映像と写真、平面では抽象が多いように感じる。秋の空が高い。空の青と黄色っぽいグレーの街並み、街路樹の緑。赤が映える。



たけし展

「ようこそ平塚美術館」は都合によりお休みさせて頂きました。



工房の脇を流れる川のせせらぎ、工房の裏は緑に覆われた山。自然の懷に抱かれた浅倉さんのアトリエは松田町寄（やどりぎ）にあった。作家生活17年目を迎えたという浅倉さん。東京に戻られた陶芸家からお借りしているというこの工房での創作活動も今年10年の節目を迎えた。技術を磨いたのは、愛知県瀬戸市。町全体が代々焼き物作りを生業としている町で、どっぷり2年間修業に明け暮れた。土は今でも瀬戸の土を使っている。1 昨年初めて出品した県展で初入選、昨年は美術奨学会賞を受賞。作家としても順調に歩み始めている。

浅倉さんの作品を始めて拝見したのは、3年前の西さがみ美術展だ。何かが誕生したような繊細にして力強い作品がとても新鮮で印象に残っていた。

今年4月の新九郎での住谷重光さんとの2人展では、大作から日用品まで幅広い作品を発表され、その大胆さと繊細さ、全体に漂う大らかな空気感に魅了されてしまった。

浅倉さんの作る形は とてもアーティスティックである。手びねりやろくろを使うのではなく型に入れて合わせて創って生れた形だという。棚には今まで使った大小の石膏型が沢山置かれていた。この技法の中からあの柔らかな面にひびの入った陶器が生まれたのだという。



作品にかすかにつけられた色も特徴的である。植物が枯れたような淡い薄茶は日本の色彩を感じさせる。特徴ある形、一見繊細に見える浅倉さんの作品には何か植物を連想させるものがあるがと聞くと、棚から乾燥した野の草や種子を机の上に並べてくれた。アトリエの周りで見つけた名も知らぬ種子、旅先で目にとまった草花の残がい、誰も目に留めないこの小さな植物の姿に彼女は惹かれるのだという。花が咲き終わり、水分も飛んで枯れた種子の筋を彼女は筋肉のようだと形容した。ギュッとしばられた種の枯れても命を次につなぐ生命力に美しさを感じるのだという。一見レースの様な艶やかな白の糸が紡ぎだしていた形の先端

は、命をつなごうと未来に向かって精一杯伸びをするタネと重なり、作品に込めた浅倉さんの思いがしっかりとキャッチできた瞬間だった。

今、制作の傍ら教育現場でのボランティアをされている。中学校と養護学校での指導からは得るものが大きいと目を輝かす。特に情緒障害を持つ方の熱中して創り出すフィギアの精密さ、創らずにはいられないという情熱には大いに刺激を受けるのだという。

アトリエには、入ったときから気になる色紙がかかっていた。「寄神社」のお札と並んだ色紙には達筆で『新鳥新樹に迷う』と書かれていた。2年前この工房の持ち主から贈られたものだという。「若い鶯が梅の若枝を嬉々として飛び交い止まり木を選んでいる早春の風景。初々しい喜びにあふれている。この迷いは『無』の深底に下った人が現実の世界に生まれ変わって第1歩を踏み出す時の迷いである。それは世のため人のために奉仕しようと決意した人の謙虚な迷いであり、慈悲心の迷いである。その意味では菩薩は永遠に迷う」と記されていた。

陶芸家と呼ばれることにはちょっと違和感があるという浅倉さん。自分の表現する素材が焼き物であるだけで「作りたいものを創りたい」とあくまでも自然体だ。「衆生を救うために多くの修業を重ねるのが菩薩」というのなら彼女は表現を通して修行を重ねていく現代の菩薩なのかもしれない。（新九郎友の会 木下和子）



[9月のこと]

9月3日横井山泰夫妻がパリへ立つので成田に見送りに行ってきた。帰路、小田原映画祭で上映される「アダン」の主人公である、田中一村展（千葉市美術館）を見てきた。50歳で奄美大島に渡り、集大成となった南国の熱帯植物や鳥、魚などの絵で有名であるが、今回初めて千葉時代の絵が紹介され全貌を知る展覧会となっている。没後の展覧会がNHK日曜美術館で紹介され一躍人気が出た作家であるが、作家として美術館で研究されるのはこれからである。奄美の海を背景に撮った自写真の澄んだ瞳が青年のようすがすがしい。栃木県立美術館で「イノセンス展ーいのちに向き合うアートー」があった。道中、思いがけず柿沼朋美さんが大賞を受賞した川上澄生美術館があったので観てきた。人口3万の鹿沼市に小さいが立派な美術館がある。イノセンス展には飯室哲也氏の知人の長重之氏が企画に関わっていて出品もしている。多くはアウトサイダーアートであるが、草間彌生、奈良美智等現代美術で活躍するアーティストの作品も同じ視点でとらえられ展示されている。ドイツに住むイケムラレイコ氏の作品が印象に残った。物語性のある、人物が入った暗い感じの絵である。ドイツ人と日本人は絵を通して観る限り精神性に近いものを感じる。26日には新制作展の加藤恭夫さんの絵を見た。あらたま展で新鮮に感じた北海道の風景50号で素敵な絵だった。新制作展では去年から20~80号の小サイズの絵のコーナーを設けたらしい。期待したい試みである。新国立美術館「陰影礼讃」は日本の5つの国立美術館所蔵作品から企画したもので、高松次郎の人物の影の絵と杉本博司の十字架の聖堂（安藤忠雄設計）の写真が印象に残った。打ち震えこぼれてくる十字架の光りがすごい。友の会の住谷重光さん出品のグループ展「視維展」、7月のVISION展（新九郎）に出品した今村綾さんの個展（Oギャラリー）も良かった。✂